

このページでは[みぬま見聞館\(大宮南部浄化センター\)](#)のトピックスを紹介をします。

国蝶オオムラサキ（7月に自然庭園で観察できる動植物について）

梅雨明けが待ち遠しい今月は、日本の国蝶に指定されている「オオムラサキ」についてお話をさせていただきます。

オオムラサキは、タテハチョウ科に分類され、翅を広げるとオスは約10センチメートル、メスは約12センチメートルとタテハチョウの仲間では最大級の大きさになります。翅の表面は、オスは青紫色、メスは茶紫色と鮮やかな色彩は国蝶としての風格を感じさせてくれます。

オオムラサキが国蝶に選定されたのは昭和32年、勇ましく、堂々としていて、華麗であること、そして当時は日本中に分布していたことによります。現在は自然に生きているオオムラサキを見ることが難しくなっているのが、想像がつきません。

オオムラサキは、長い時間をかけて人々が自然と寄り添いながら作り上げてきた自然環境である「里地里山」を好んで棲んでいます。その「里地里山」は、クヌギやコナラそしてエノキなどの雑木林が見られ、オオムラサキの幼虫がエノキの葉を食べ、成虫がクヌギなどの樹液を吸い、生命を繋ぐ場所となります。

そのようなところで、エノキに産卵された数個から数十個の直径1.5ミリメートル程の卵は、1週間ほどで孵化します。幼虫は頭に一對の先端が二股に分かれたツノと、背中に四對の突起を持ち緑色です。幼虫の姿で冬を越しますが、その間は茶褐色となります。

5回の脱皮をして6令幼虫となったあとサナギになります。サナギは4センチメートル程の大きさとエノキの葉とそっくりな姿、カタチをしていて、エノキの枝に糸を張ってぶら下がっているため、見つけるのは容易ではありません。やがて羽化をして成虫となり、クヌギなどの樹液を吸い、産卵を終え命を繋げると、一生を終えてしまいます。

みぬま見聞館では今から7年前の平成28年から、オオムラサキの保護団体から幼虫を分けてもらい、保護活動として育てています。

最初の年は卵が産み落とされたことに喜び、卵をそのままにしていたら、アリに食べられてしまいました。2年目は、最初の失敗を教訓にして産み付けられた卵をすかさず回収しました。そうすると孵化した幼虫が冬を越し、翌年に成虫になるまで成長しました。職員一同、感無量でした。

その後は、オスとメスの成虫となるタイミングがずれたり、雨の多い天候の影響もあって、卵は産み付けられますが、無精卵ばかりで、翌年に命を繋ぐことができていません。命を預かることの難しさを痛感させられています。

今年も春に分けていただいたオオムラサキの幼虫が成長し、サナギや成虫となり、みぬま見聞館で観察いただけます。

数は少ないですが、その華麗な姿は感動さえ覚えます。この機会にぜひご鑑賞ください。



オオムラサキのオス
鮮やか色彩で目を奪われます



オオムラサキのメス
光の加減でメスも美しい姿となります



エノキの葉と実
オオムラサキの幼虫はエノキの葉しか食べません



オオムラサキの卵
見つけると嬉しくなり、孵化を祈るばかりです



オオムラサキの幼虫(冬越しの姿)
寒い冬を乗り越える姿に変化しています



オオムラサキの幼虫
春にエノキの葉が生え揃うと爆食します



オオムラサキのサナギ
エノキの葉に紛れると見つけるのは困難です



ナガサキアゲハ
みぬま見聞館付近でも普通に見られます



シオカラトンボ
市街地でもよく見かけるトンボです



ナツアカネ
代表的な赤とんぼの1種です